Wikipediaは大学教育で資料となり得るのか*

依　田　悠　介

要　旨

本論文では、これまでに人類が例を見ないパンデミック、Covid-19の蔓延の中で、物理的な移動が妨げられ、図書館へのアクセスが難しくなり、かつ、本へのアクセスが難しくなった2020～2021年の間に、ウェブリソースとしてのWikipediaが百科事典や辞書の代わりになり得るのかについて検討する。

具体的には、これまでにまことしやかにささやかれる「『Wikipediaは信用ならない』というような言説が本当に正しいのか」について、サンプル調査を行った。その結果、Wikipediaの利用方法については、説明が必要であるとは思われるものの、Wikipediaの記述は教育の場面で資料となり得るということを示唆することがわかった。本論文の意義はWikipediaが大学教育でも利用可能であることを示したことである。

Ⅰ．Wikipediaと大学教育

2020年初頭より世界中で蔓延する新型コロナウィルスに端を発するCovid-19による、世界の混乱は日本の大学教育においても大きな影響を与えている[1]。本論文執筆時点の2021年9月においても、Covid-19に対する効果的な治療薬や根本的な病理の解明はされておらず、現在も世界の教育に対して大きな影響を与えている。今後もCovid-19による大学教育への影響は続くであろうと考えられる。

このような世界情勢の中で本論文は、大学教育でのインターネットの利用に関する知見を提供することを目的としている。その中でも本論文ではWikipedia 日本語版[2] iを対象として、それが大学教育でどのような役割を担うのか、また、これまで担ってきたのかに関して検討することを目的とする。

これまで、管見の限りでは、Wikipediaに関する大学教育での利用が推奨されてきた歴史はなく、教員によっては、「Wikipediaの情報は信用ならない、Wikipediaは大学では利用するべきではない」という声があった。その一方で、「Wikipediaの記事の質に対しある一定の信用をおき、大学教育での使用に耐えうる」という声もあった。

そのような背景で、本論文では、「Wikipediaは大学レベルの授業で参照することができるレベルに信頼性が高いのか」という問いを立て、検証することを目的とする。以下では、セクションⅡでWikipediaの情報に関する信頼性に関する先行研究をレビューする。そして、セクションⅢでは、言語学、特に大学学部レベルで生成文法（Generative Grammar）の概論の授業を実施することを念頭において、Wikipediaの情報は信頼できるのかについて検討を行う。セクションⅣでは、「大学教育で使う」

とはどのような意味を持つのかに関して検討する。そして最後に、セクションⅤでWikipediaの情報は大学教育、特にCovid-19の影響を受けている現在において、重要な役割を担うと主張する。

Ⅱ．Wikipediaとは

1　Wikipediaの概要

本節では、Wikipediaに関する基本的な情報についてまとめる。Wikipediaは、誰でも編集可能なオンライン百科事典である。その特徴は、世界中のボランティアの共同作業によって執筆されているところにある。メディアウィキのシステムを利用しており、フリーライセンスで提供されるという特徴を持っている。

Wikipediaは、2001年1月に開始、その運用は2003年から非営利法人ウィキメデイア財団が行っている。これは、オープンコンテントで商業広告が存在していないことに起因しており、その運営は主に寄付によって行われている。

2001年5月からは多言語化が行われ、日本語版は2001年5月に作成された。さらに2002年9月ごろからインターフェイスの日本語訳が始まった。Wikipediaという名前は百科事典という意味の‘encyclopedia’とウェブブラウザ上でウェブページを編集することができるシステム‘wiki’からの造語である。

現在、ウィキペディアから端を発したa. ウィキを用い、b. 不特定多数のボランティアの手を借り、c. オープンコンテントの知的資源はウィキメディア財団が管理するものだけでも15項目に登る。

2　Wikipedia日本語版の特徴

Wikipediaは2020年9月現在313の言語で開設されており、Wikipedia日本語版は全世界で13番目に記事数が多く122万記事以上の記事を持つ[3]。また、「ウィキペディア日本語版」によれば、日本語版の大きな特徴として、編集をする利用者のうち登録せずにいる利用者の比率が高いことが指摘されている。さらに、現在の日本語での記事新設数に関しては減少傾向にあるという。

Ⅲ．Wikipediaの信頼性

1　Wikipediaの信頼性についての研究

本節では、Wikipedia の信頼性について、これまでの先行研究を概観する。

日下（2012）[4]によれば、Wikipediaは信頼性が要求される百科事典であり、オンラインであること、誰でも編集可能であることから、その信頼性がたびたび批判の対象となっていることを指摘している。Wikipediaの信頼性に関する調査としては、Wikipedia英語版では、『ネィチャー』によるWikipediaとEncyclopedia Britannicaの比較調査が良く知られている[5]。そこでは、42の記事について検証を行い、一般的に考えられているよりも、Wikipediaの記述は確かなものであり、その信頼性はEncyclopedia Britannicaとほぼ同様であると述べられている。しかし、この評価はWikipedia英語版に関する評価であり、そのままWikipedia日本語版に当てはめることは難しいという評価もある[6]。しかし、

Wikipedia英語版と同一のプラットフォームを利用するWikipedia日本語版において、信頼性を英語版と同様のレベルまで上げることは不可能ではないとも同時に述べられている。

その一方で、Wikipedia日本語版に関する信頼性の評価はそれほど多くないという。上掲の日下（2012）によれば、2006年から2011までの間に行われた調査として主なものが、2009年のヤフーバリューインサイト株式会社による「情報メディアに関する調査」[7]、2010年に実施された株式会社ドゥ・ハウスによる「情報メディアに関する利用実態調査」であり、その一部が公開されているという[8]。この時点では、Wikipediaの情報はテレビやラジオには劣り、雑誌を上回る程度とされていた。また、専門的な知識を持つものによる評価として「人文リソースサイト　アリアドネ」が2006年に行ったアンケートでは「基本的に正確：26/問題が多い：33/どちらとも言えない18」という結果がある[9]。長塚・神野（2011）[10]「学生におけるWikipedia日本語版の利用動向」では司書講習の受験者にWikipedia利用についてアンケートを行い、「信頼できる2.3%/どちらとも言えない84.1%/信用していない13.1%」という結果が出ている。橿原他が2008年に公開した「グループ研究レポート」[11]の「Wikipediaの評価」では、「100パーセント信頼できるとは言い切れない点が少なからずあることも考慮しなければならない」としつつも、結論として「Wikipediaは信頼できる」としている。

近年では、佐藤他（2018）による報告[12]で、Wikipediaの内容が日本大百科全書より正確であるように見えるにもかかわらず、見た目がWikipediaであるだけで日本の大学生が正確性に劣ると判断するという結論も出ている。

これらから明らかな点は、多くの場合にはWikipediaの情報は高い信頼性を持っているが、第3の要因（外的要因）により、その信頼性が低く認識されているということが言えるだろう。

次節以降では、理論言語学の専門的な内容を用いてWikipediaの記述が本当に信頼性の低いものなのかについてサンプル調査を行い、Wikipediaの記事が必ずしも信頼性が低いわけではないことを示す。

2　Wikipediaに解説される生成文法の概念

以下では、Wikipediaにおける記述の確からしさの検証を行う。ここでは、Wikipediaの記述と紙をベースとした用語辞典・事典の記述を比較し、その差異について検討する。本論文ではWikipediaの幅広い記述を全て網羅的に検討することは原理的に不可能なため、検討する領域を絞ることとする。具体的には、大学学部で初学者が学ぶ「生成文法」に関連した授業で導入される概念・用語に限定し、検討を行うこととする。

概念・用語に関しては、初学者向けの「生成文法」の標準的教科書である以下から抽出した用語についての調査を行う。

（1）和書

- 渡辺　明（2009）『生成文法』. 東京大学出版会[13]
- 阿部　潤（2008）『問題を通して学ぶ生成文法』. ひつじ書房[14]

（２）洋書

- Andrew Carnie (2013) Syntax. A Generative Introduction. Wiley-Blackwell[15]
- Liliane Haegeman (1994) Introduction to Government and Binding Theory. Wiley-Blackwell.[16]

（３）用語辞典・辞典類

- 中野弘三・服部義弘・小野隆啓・西原哲雄（2015）「最新英語学・言語学用語事典」. 開拓社[17]（以下、最新英語学辞典とする）

(1)、(2)に挙げた教科書は、大学学部で生成文法を学ぶ際に使われることが多い。続いて、概念・用語の選定に関して次節で検討する。

3　用語の検討方法

本節では、概念・用語の選定に関わるプロセスに関して検討する。Wikipediaはそれ自体が既に完成された百科事典ではなく、さらに言語学・英語学に特化した事典ではないという性質から、英語学を専門的に扱っている辞典・事典類よりも掲載されている用語が少ない。よって、本論文で検討する項目はWikipedia に掲載されていてかつ、上記に挙げた生成文法の標準的教科書に掲載されている用語に限った。また、その中でも「必須である」と思われる以下の概念・用語についてWikipediaと用語集の比較を行なっていくこととする。以下の例は全てWikipediaに項目として存在する生成文法の基本用語である。

（４）ａ．普遍文法（Universal Grammar）
　　ｂ．句構造規則（Phrase Structure Rule）
　　ｃ．構成素（Constituent）
　　ｄ．Ｘバー理論（X-bar Theory）

それぞれの用語は以下の表にあるように、上記の教科書で扱われている。ページ番号は便宜的に索引で提示されるページ番号を振ったものである。例えば、「普遍文法（Universal Grammar）」に関しては、索引によれば、渡辺（2009）ではp.3で言及されているということである。また、用語の中には当該教科書で扱われていないものもあった。本論文では、少なくとも、日英語で１つずつ以上の教材が取り上げた例に関して見ていくこととした。また、(4)に挙げられた概念は生成文法では基本的な概念であるため、(4)bの「構成素 “constituent”」のように、索引に上がらず教科書で使われている例もあることを断っておく。

	(4)a	(4)b	(4)c	(4)d
渡辺（2009）	有り(p.3)	有り(p.15)	有り(p.13)	有り(p.59)
阿部（2008）	なし	有り(p.14)	有り(p.13)	なし
Carnie（2013）	有り(p.19-29)	有り(p.74-90)	有り (p.72-4，110，123)	有り(p.165-206)
Haegeman（1994）	あり(p.12-18)	同様の記述あり	有り	有り(p.103-6)

4　生成文法の用語の事典・辞書とWikipediaの比較

4.1　普遍文法（Universal Grammar）

本節では、生成文法の基本的仮定のひとつの「普遍文法」について事典・辞書の記述とWikipediaの記述の比較を行う。普遍文法とは、生成文法理論の根幹をなす仮定のうちの一つであり、プラトンの問題（Plato's problem）[ii]と呼ばれる問題に対する一つの回答と考えられている。まず以下では、最新英語学辞典からの記述を見る。

（5）Universal Grammar（普遍文法）

自然言語に共通する普遍的な諸特性を規定する理論をいう。人間が生まれながらに持つとされる生得的な言語機能に関する理論である。UGと略す。［14ページ：152］

最新英語学辞典の記述は、普遍文法それ自体に関する記述としては、十分なものである。しかしながら、Universal Grammarが「いつ」「誰によって」提唱されたかについての記述が不足している。

一方、Wikipediaの記述では、最新英語学辞典の記述に加え、提唱者に関する情報、さらには、言語獲得との関係に関して記述している。以下では、概要部分のみを掲載する。

（6）普遍文法[18]

普遍文法（ふへんぶんぽう、Universal Grammar）は、言語学の生成文法における中心的な概念で、全ての人間が（特に障害がない限り）生まれながらに普遍的な言語機能（faculty of Language）を備えており、全ての言語が普遍的な文法で説明できるとする理論。ノーム・チョムスキーが『Syntactic Structures』（1957年）で提唱した[1]。

この場合の文法とは、広義のそれであり、統語論のみでなく音韻論、意味論など、言語を操る上でのあらゆる規範を指す。（[1]はChomsky – definition of Chomsky by the Free Online Diction, Thesauras and Encyclopedia:https://www.thefreedictionary.com/Chomskyへとリンク）

なお、英語においては、この理論そのものは大文字の「Universal Grammar（UG）」で表し、その研究対象は小文字の「the universal grammar」で表す。［…］

4.2　句構造規則（Phrase Structure Rules）

句構造規則とは、Chomsky（1957）によって提唱された、文を形成するための一般規則である。句構造規則は、左端の要素がその内部構造として右側の構造を持つことを表している。具体的には（7）のような規則であるが、その規則を回帰的（recursive）に適用することにより、言語の離散無限性（discrete infinity）を保障している。

（7）句構造規則の例

a．S → NP VP

b．VP → V（NP）（NP）（PP）（S）

c．PP → P N

d．NP →（Det）NP

このような句構造規則について、最新英語学辞典では、「句構造規則」に関する項目は立てず、「句構造」の項目で以下の（8）、（9）のように、説明をしている。

（8）Phrase structure（句構造）語の線形順序、語が複数組み合わさった単位である構成素とそれらの間の階層関係、構成素の統語範疇などの情報の相対を示したもので有り、樹形図や表示付括弧区分で示される。構成素構造と同義。→constituent structure［14 ページ：140］

（9）Constituent structure（構成素構造）文や句は単語が線上に羅列されているのではなく、単語が別の単語や句と結びついて順次より大きなまとまり、つまり構成素を形成しながら構築される。この意味において、文や句は構成素構造を持つというが、句構造と同義である。表示つき括弧区分（labeled blanketing）や樹形図で表される。［14 ページ：122］

（8）、（9）の記述では、句構造規則がどのような体系を持っているのか、あるいは、どのような規則で目的がなんであるかが記述されている。一方で、句構造規則の根幹となる、それぞれの句構造規則（7）についての記述がなく、不十分と言わざるをえない[iii]。

一方でWikipediaの記述の冒頭では、（10）のような記述がなされている。

（10）句構造規則[19]

句構造規則（くこうぞうきそく、英: phrase structure rules）は、統語論において、文の構成素構造を産み出す規則、およびそれについての研究を指す[1][2]。1950年代にノーム・チョムスキーによって提唱された[3][4]。[…]

（[1]は「“言語学の基礎－主語はどうやって決まるの？：文の構造”．弘前大学 共通教育棟（2009年）．2013年5月2日閲覧」へのリンク、[2]は「^ａｂｃｄ金久保正明．“構文解析の方法”．静岡理工

科大学総合情報学部人間情報デザイン学科・知能インタラクション研究室. 2013年5月2日閲覧」へのリンク、[3]は「Chomsky（1956）, Chomsky（1957）による」との註釈が、[4]には「句構造規則の概要については、 Borsley（1991：34ff.）、 Brinton（2000：165）、 Falk（2001：46ff.）を参照。」との註釈がつく）

本稿では、Wikipediaの記述の大部分を紙幅の都合上割愛したが、上記概要をスクロールしていくと、書き換え規則についての記述があり、英語の構成素構造として、以下が挙げられている。

（11）［…］例えば、英語の構成素構造は次のように表すことができる。

1．S → NP VP

文（S）は、名詞句（NP）と、それに続く動詞句（VP）から成る。

2．NP → Det N1

名詞句（NP）は、限定詞（Det）と、それに続く名詞（N1）から成る。

［…］以上のようにして、構文（文法）的には正しい文のみを、しかも無限に作ることができる［…］[19]

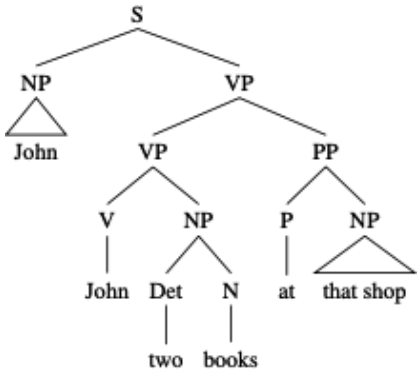
上記では、句構造規則に関する具体例が挙げられ、さらに、句構造規則を用いることによって、無限に文を生成することができるという、句構造規則の根幹に関わる概念が記述されている。その点で、最新英語学辞典よりも、より詳細かつ閲覧者にとって有益な情報が含まれているといえよう。

4.3　構成素（Constituent）

以下では、構成素に関する記述を確認する。構成素とは、単語とは異なり、母語話者がある種のまとまりであるとして認識する単位のことをいう。これは、上記の句構造規則とも関連するが、句構造規則において、終端となる接点のレベルあるいは、句として用いられるレベルは統語操作の対象となりえる。そのような要素を母語話者は文を構成する「一つの単位」として認識しているという考え方が、生成文法における「構成素」である。

具体的には、以下のような例が挙げられる。

(12) John bought two books at that shop.



(12)の例では、文全体はSとなるが、Sには、NP、VPが直接支配されている。この段階で、NPもVPも構成素をなしているが、NPとVPは構成素を成していないと考える。さらに、VPのレベルを考えると、VPはV、NP、PPを含んでおり、それらは構成素である。構成素か否かに関しては、統語テストによって確かめることができる。例えば、置き換えや、移動などがその一例であり、置き換えの場合には、two booksがthemに置き換えられることから、また、VPがdo soに置き換えられることから、VPが支配する全ての要素が1つの構成素をなしていると考えることができる。

(13) a. John bought [them] at that book shop.
b. (Mary bought two books at that shop, and) John [did so (= bought two books)] at that shop, too.
c. It was [two books] that John bought at that shop.

このような構成素に関する説明について、まず最新英語学辞典を見ることとする。最新英語学辞典では、構成素の項目を立て、さらに、構成素を確かめるための構成素テストへの参照がされており、非常に親切な紹介となっている。

(14) Constituent (構成素) 文や句を構成する構造上のまとまり、ある単語の記号列が構成素であるかどうかは、構成素テストにより診断される→constituency test (p122)

(15) Constituency test (構成素テスト)単語の記号列が構成素であるかどうかを診断するテスト、置換、移動、削除、等位接続などがある。例えば、Mike wanted to win the game, and [win the game] he did.では、win the game の移動が許されることから、win the gameは1つの構成素であることがわかる。(p.122)

続いて、Wikipediaからの引用である。Wikipediaでは、構成素の項目の中に、最新英語学辞典の「構

成素」および、「構成素テスト」の両者が記述されている。

(16) 構成素（こうせいそ、英： constituent）は、統語論的な解析において、文の階層構造の単位として機能する語、または語のまとまり。主に句構造文法で扱われる概念だが、依存文法でも扱われ構成鎖に拡張されている。特定の語の連なりが構成素であるかどうかを判断するためのテストが数種類ある。これらのテストでは、文の一部を移動したり、別の語句で代用したりなどし、その結果を直接構成素分析（英語版）（immediate constituent analysis 、略して IC analysis）の手がかりとする。[…] [20]

最新英語学辞典では、置換、移動、削除、等位接続の4つのテストが紹介されていたが、Wikipediaの「構成素」の項目では、以下の8項目が例とともに記載されている。

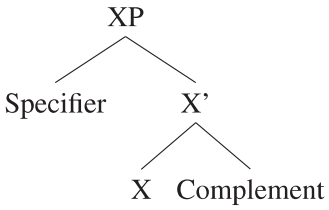
(17) a．話題化（Topicalization または fronting）
b．分裂分（clefting）
c．擬似分裂分（pseudoclefting または、preposing）
d．代用（pro-form substitution または replacement）
e．返答文での省略（answer ellipsis または question test）
f．受動態または能動態への変換（passivization）
g．削除（omission または deletion）
h．等位構造（coordination）[19]

この点においても、Wikipediaの記述は十分に実用的であると言える。

4.4 Xバー理論（X-bar Theory）

最後にXバー理論について検討する。Xバー理論は、句構造規則の問題点であった、選択制限の問題をθ規準（θ-criterion）により解決したのちに出現した句構造規則に関する一般原理である。その基本形式は、Chomsky（1970）[20]により提案されたものである。句構造の形式としては、全ての句は内心構造を持ち、その中心部を主要部（Head ＝X）とする。その姉妹関係（sister）には、補部（Complement）を持つ。さらに、主要部と補部は中間投射（X'）を形成し、中間投射は指定部と姉妹関係にあるという構造に関する一般理論である。以下にそのスキーマを掲載する。

（18）Xバー理論のスキーマ（X'-Schema）



上記のXバー理論に関して、最新英語学事典では以下のような記述がされている。最新英語学事典では、Xバー理論を理解するにあたり最小限度の記述がされ、上記にあげた概念に関しては必要十分だと判断ができる。

（19）X-bar Theory（Xバー理論）句構造規則を規制する、あるいはそれに代わる一般性の高い句構造理論で、全ての言語の全ての句範疇が構造的類似性を共有するという考え。全ての句の中心には主要部Xがあり、Xが補部と共に中間投射X'を形成し、X'が指定部とともに最大投射X"（XP）を形成するとされる。（p.154）

Wikipediaの記述は以下の通りである。

（20）Xバー理論[21]

Xバー理論（エックスバーりろん、英：X-bar theory）は、言語学において、全ての自然言語に共通する統語論的要素を識別しようとする理論[1][2]。Xバー式型（X-bar schema）と呼ばれる構文木を用い、あらゆる自然言語のあらゆる句をXPという構図、およびその組み合わせで示すことができるとする[3][4]。1970年にノーム・チョムスキーが提唱し[5]、レイ・ジャッケンドフがさらに発展させた[6]。なお、Xバー理論は、あくまでも句構造文法という枠内における理論で、依存文法には適用されない。[…]

（[1]は「"Definition of X-bar". Webster's Online Dictionary. 2013年3月5日閲覧。」へのリンク、[2]は「"Definitions for X-bar theory". Definitions.net. 2013年3月5日閲覧。」へのリンク、[3]は、「吉田光演. "Xバー理論と語順－英語、ドイツ語、日本語の基本語順の比較". 広島大学 学術情報リポジトリ. 2013年3月5日閲覧。」へのリンク、[4]は「藤田耕司（京都大学大学院 人間・環境学研究科）. "DESCENT WITH MODIFICATION–GENERATIVE GRAMMAR AND THE UNIVERSALITY/DIVERSITY - GENERATIVE GRAMMAR". 生命の起原および進化学会. 2013年5月2日閲覧。」へのリンク、[5]はChomsky, Noam（1970）. Remarks on nominalization. In: R. Jacobs and P. Rosenbaum（eds.）Reading in English Transformational Grammar, 184–221. Waltham: Ginnの参考文献紹介、[6]は「Jackendoff, Ray（1977）. X-bar-Syntax: A Study of Phrase Structure. Linguistic

Inquiry Monograph 2. Cambridge, MA: マサチューセッツ工科大学出版局」の参考文献の紹介）[19]

Wikipediaでは、(20)の記述に続いて、具体的な例文を挙げながら、Xバー理論のスキーマを説明している。また、近年の理論的発展も踏まえた記述が見て取れる。

4.5　ここまでのまとめ

本節では、生成文法理論に関する基本的な概念に関する紙の事典の記述とWikipediaの記述を比較した。Wikipediaは紙の事典とは異なり、紙幅に制限がないことから、基礎的な内容から、高度な内容、そして、古典的な考え方から、最新の考え方まで幅広くカバーすることができている。紙の辞書・事典にはない利点で有り、生成文法の理解には非常に役に立つと思われる。

一方で、Wikipediaの記述は既に先行研究で指摘されていた通り、やや専門的になりすぎる部分があり、初学者がそれだけを読むには難しいと考えられる部分もある。

しかしながら、ここまでの項目を比較する限り、Wikipediaの記事の信頼性が著しく低く、参照に値しないことはないと考えられる。このことは、高等教育において、Wikipediaの利用が可能であることを示していると考えられる。

ただ、残る問題は、Wikipediaの記事は、少なくとも生成文法に関しては発展途上であり、見出しの項目の数が少ないということである。

Ⅳ.「Wikipediaを使う」とは

1　Wikipediaを使うとは？

これまでWikipediaに対する信頼性に関しての考察を行ない、その信頼性に関して、著しく紙媒体の辞典・事典などに劣るということはないという点を示してきた。しかしながら、Wikipediaがある程度の信頼性を持つことがそのまま「授業で使えること」を示しているわけではない。その使用用途が問題になる。以下では、Wikipediaはどのように使われるべきなのかについての石黒（2012）[22] による言及を踏まえて、Wikipediaの使用に関する考察を行う。

2　Wikipediaの信頼性と使い方

例えば、Wikipediaの使用に関しては、大学で初めてレポートや論文を書く学生を対象として書かれた、レポート指南書の石黒（2012）にその使い方の記述がある。なお、石黒（2012）では、インターネット上の情報の取り扱いについてページを割き解説しており、そこでは、学生には馴染みがあるGoogleによる検索からスタートし、Google Scholar、CiNii、OPACそして、大学の図書館の利用を推奨・紹介している。その中で、Wikipediaの使用に関しては、以下の記述がある。

(21) 英語のWikipediaは総じて研究の記述が豊かな印象がありますが、日本のWikipediaは、芸能、スポーツ、サブカルチャーに詳しい印象があり、研究にかんしては玉石混こうです。しかし、イン

ターネット情に集う匿名の有志によって作りあげられたということを考えれば、かなり高い水準にあるといってよいと思います。その理由は、Wikipediaへの書き込みは厳格なルールに基づいておこなわれていること、Wikipediaへの書き込みへのチェックが十分におこなわれていることという2点によります。（石黒 2012）

石黒が述べるように、Wikipedia日本語版にサブカルチャー関連の話題が多いことはウィキペディア日本語版の項目にも書かれており[3]、Wikipedia内部でも認識されている。

加えて石黒は「Wikipediaの記事は、引用のパッチワークによって出来上がっている」ことを指摘しており、記事には必ず信用にたる出典を示すことが求められ、個人が勝手に記事をねつ造することができないようになっているとも同時に述べている。さらには、「Wikipediaが絶えず閲覧者の目に晒され」「学会誌と同様のシステムを採用している」と述べている。この点で、石黒はWikipediaの情報の信頼性を評価していると考えて良いだろう。

しかし、石黒も諸手をあげてWikipediaを利用することを推奨しているわけではなく、以下のような重要な指摘をしている。

（22）Wikipediaは論文の引用文献としては使えません。それはWikipediaの質が低いからではなく、Wikipediaの記事には、オリジナルの情報源（ソース）があり、そちらを引用しなければならないからです。[…] Wikipediaは引用のパッチワークですから、Wikipediaから引用すると、どうしても孫引きになってしまいます。[…]そのように考えると、論文作成におけるWikipediaの役割は、自分の研究テーマについて、どのような考え方があるか、どんな文献があるかの当たりをつけるためにあると考えたほうがいいでしょう。

概略、石黒の指摘では、Wikipediaは事典であるため、「レポートや論文でそれ自体を参考文献として利用することは望ましくない」と述べているといえよう。この点は非常に重要な指摘である。石黒同様、信頼性とは別に、Wikipediaの使用に難色を示している教員が、「レポートや論文の引用文献」として、Wikipediaの使用を望ましいと思っていないことはすでに依田（2021）[23]において指摘されている。しかし「引用文献」としての使用が望ましくないという指導が、授業全般に対する「Wikipediaの禁止」と学生が捉えていることが多い現状も同論文では指摘している。つまり、学生・教員の中で、以下の2点が明確に分けられていない、あるいは、学生が明確に区別をしていない現状が考えられる。

（23）a．Wikipediaを論文の参考文献として、あるいは、ある種の先行研究として利用し、それを根拠に論文やレポートを執筆する。

b．Wikipediaをある種の事典として利用し、現在学習している項目の概要を知るために利用する。

石黒の指摘や、本論文でのWikipediaの信頼性に関する検証を鑑みると、「大学での教育でWikipediaを使用すること」自体には、何ら問題がないと考えられる。しかし、Wikipediaは辞書・事典であり、その記述をレポートで利用することはアカデミックライティングとして適切ではないということである[iv]。このような、大学教員の指導と学生の理解の間の齟齬に関しては依田（2021）に詳しいが、これは大学の偏差値の違いよって緩和されるわけではなく、依田が調査した大学で一般的に起きていることのようである。

V．結　論

本論文では、Covid-19の収束が見られない状況で、大学への登校や図書館の利用が制限される中、大学の講義で利用できるリソースとしてウェブリソースのWikipediaの情報に焦点を当てた。Wikipediaの利用に関して、問題となりえることはWikipediaの信頼性であるとの言説に対し、本論文は、Wikipediaの信頼性に関するこれまでの研究を概観しその内容の検討を行った。さらに本論文では、Wikipedia 日本語版を対象として、その情報が信頼できるのか否かについて、生成文法理論で用いられる用語をサンプルとして事典との比較調査を行った。比較調査の結果、事典とWikipediaを比較すると、Wikipediaに掲載される生成文法の情報は信頼できる内容であることがわかった。

これから得られる結論として、Wikipediaは大学授業での利用が可能な媒体であり、紙の辞書・事典に代わるものとして利用できるということである。

引用資料・文献一覧

［1］文部科学省. 新型コロナウィルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況. 文部科学省ウェブページ.（オンライン）2002年7月17日.（引用日: 2020年9月27日.）https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf.

［2］ウィキペディアメインページ. ウィキペディア　日本語版.（オンライン）https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8.

［3］全言語版の統計. ウィキペディア　日本語版.（オンライン）https://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:%E5%85%A8%E8%A8%80%E8%AA%9E%E7%89%88%E3%81%AE%E7%B5%B1%E8%A8%88.

［4］日下 久八（2012）「ウィキペディア：その信頼性と社会的役割」. 情報管理. Vol. 55-1. pp. 2-12.

［5］Giles Jim.（2005）. Internet encyclopaedias go head to head. Nature Vol. 435.

［6］渡辺智暁（2011）「われわれはウィキペディアとどうつきあうべきか：メディア・リテラシーの視点から」. 情報の科学と技術 61巻2号 pp. 64-69.

［7］ヤフーバリューインサイト株式会社（2010）.「Yahoo!リサーチ『情報メディアに関する調査（第5回）』を実施」. PR-Times .（https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000049.000000624.html

［8］株式会社ドゥ・ハウス（2010）「情報メデイアの利用・信頼・意向を見ると『テレビ』『新聞』に加えて『比較クチコミサイト』が高い～情報メディアに関する自主調査」. My アンケート.http://www.myenq.com/topics/detail.php?topic_id=31

［9］二木麻里（2006）.「アリアドネ・アンケート 『ご自身の専門分野の記述に関して、ウィキペディアの日本

語版をどう評価されますか？』」. アリアドネ. http://ariadne.jp/enquete200602/cgi-bin/enquete.cgi
[10] 長塚隆・神野こずえ.（2011）.「学生における Wikipedia 日本語版の利用動向.」情報知識学会誌 No.21-2 pp.149-156.
[11] 樫原真知子、武宗次郎、遠藤有美子、土井亮平（2008）.「Wikipediaの評価」. 慶應義塾大学文学部図書館・情報学専攻上田修一研究会2007年度グループ研究レポート（現在リンク切れ）
[12] 佐藤翔、楠本千紘、服部亮、大菅真季、浅井理沙、阿部真央、久山寮納（2018）.「日本の大学生は情報源がWikipedia日本語版である情報の信憑性を他のオンライン百科事典である情報よりも低く判断する」. 情報知識学会誌. Vol.28-3. pp. 223-252.
[13] 渡辺明（2009）.『生成文法』. 東京大学出版会.
[14] 阿部潤（2008）.『問題を通して学ぶ生成文法』. ひつじ書房
[15] Carnie, Andrew（2013）. *Syntax: A Generative Introduction*. Wiley-Blackwell.
[16] Haegeman, Liliane（1994）. *Introductino to Government and Binding Theory*. Wiley-Blackwell.
[17] 中野弘三、服部義弘、小野隆啓、西原哲雄（2015）.『最新英語学・言語学用語事典』. 開拓社
[18] 普遍文法. フリー百科事典　ウィキペディア日本語版. https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%99%AE%E9%81%8D%E6%96%87%E6%B3%95#:~:text=%E6%99%AE%E9%81%8D%E6%96%87%E6%B3%95%EF%BC%88%E3%81%B5%E3%81%B8%E3%82%93%E3%81%B6%E3%82%93%E3%81%BD%E3%81%86,%E8%AA%AC%E6%98%8E%E3%81%A7%E3%81%8D%E3%82%8B%E3%81%A8%E3%81%99%E3%82%8.
[19] 句構造規則. フリー百科事典 ウィキペディア日本語版.（オンライン）https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%A5%E6%A7%8B%E9%80%A0%E8%A6%8F%E5%89%87#:~:text=%E5%8F%A5%E6%A7%8B%E9%80%A0%E8%A6%8F%E5%89%87%EF%BC%88%E3%81%8F%E3%81%93%E3%81%86,%E3%83%81%E3%83%A7%E3%83%A0%E3%82%B9%E3%82%AD%E3%83%BC%E3%81%AB%E3%82%88%E3%81%A3%E3%81%A.
[19] 構成素. フリー百科事典　ウィキペディア日本語版.（オンライン）https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A7%8B%E6%88%90%E7%B4%A0#:~:text=%E6%A7%8B%E6%88%90%E7%B4%A0%E3%81%A8%E3%81%AF%E3%80%81%E6%96%87,%E3%81%8C%E6%A7%8B%E6%88%90%E7%B4%A0%E3%81%A7%E3%81%82%E3%82%8B%E3%80%82.
[20] Chomsky, Noam（1970）. Remarks on Nominalization. R Jacobs and P Rosenbaum eds. *Reading in English Transformational Grammar*. Gerogiatown Univ. School of Langauge.
[21] Xバー理論. フリー百科事典　Wikipedia日本語版.（オンライン）https://ja.wikipedia.org/wiki/X%E3%83%90%E3%83%BC%E7%90%86%E8%AB%96#:~:text=X%E3%83%90%E3%83%BC%E7%90%86%E8%AB%96%EF%BC%88%E3%82%A8%E3%83%83%E3%82%AF%E3%82%B9%E3%83%90%E3%83%BC,%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%8C%E3%81%A7%E3%81%8D%E3%82%8B%E3%81%A8%E3%81%99%E3%82.
[22] 石黒圭（2012）『この一冊できちんと書ける論文・レポートの基本』. 日本実業出版社.
[23] 依田悠介（2021）「大学教育でのWikipediaの利用に関する調査報告」. 発表資料. МЕЖДУНАРОДНОЙ НАУЧНОЙ КОНФЕРЕНЦИИ ПО ЯПОНСКОЙ ФИЛОЛОГИИ И МЕТОДИКЕ ПРЕПОДАВАНИЯ ЯПОНСКОГО ЯЗЫКА. ИССА.
[24] 戸田山和久（2012）『新版 論文の教室』. NHK出版

注

＊本論文の内容は、2021年10月の「ことばを考える会」於 東洋学園大学、「МЕЖДУНАРОДНОЙ НАУЧНОЙ КОНФЕРЕНЦИИ ПО ЯПОНСКОЙ ФИЛОЛОГИИ И МЕТОДИКЕ

ПРЕПОДАВАНИЯ ЯПОНСКОГО ЯЗЫКА」於 ИССА において発表した内容を一部含んでいる。上記研究会・学会において、コメント・質問を頂いた先生がたには感謝申し上げる。また、筆者に本研究の動機を与えてくれた、Wikipediaに対する不信感を背景とし、Wikipediaに対する怒りのようなものを筆者にぶつけてくれた諸先生がたにも感謝申し上げる。先生がたの熱いWikipediaに対する不信感・怒りがなければ本研究は存在していませんでした。他にも、たくさんの学生さんがインターネットの使用に関して節度を持たず、レポートにおいてコピペをしてきたことも、インターネット資料に関する調査を行う動機となりました。それらの学生さんたちにも記して感謝申し上げます。

最後に本研究のブレインストーミング段階で御意見をくださいました、東洋学園大学の山本博子先生、竹内雅俊先生、工学院大学の秋本隆之先生、大阪大学の下村朱有美先生、そして、主夫として、そして、パパとして活躍する嶋村貢志先生の諸先生がたには記して感謝を申し上げる。当然のことながら、本論文に関する責任はいつもの通りである。本論文に関しては、東洋学園大学より2020～2021年度特別研究費「言語学の知見を生かした文章作成教育の開発」（代表：依田悠介）として援助を受けている。

i　以下では、特に断りのない場合、Wikipedia日本語版をWikipedia・ウィキペディアと表記する。

ii　プラトンの問題とは、言語習得の過程において、幼児はこれまで聞いたことのない発話を生成したり、聞いたことのない文の意味理解ができるという問題を指す。

iii　紙の辞書や事典の記述が短く、簡潔になる理由として紙幅の都合があると考えられるため、紙の辞書の記述が短いことがすぐさま辞書・事典の不備となるわけではない。その点の考察に関して別稿に譲る。

iv　辞典や辞書をアカデミックライティングで使うことに関しては、戸田山（2012）[24] では、「『広辞苑』攻撃を含む論文」として紹介している。戸田山では、そのような論文は「まともであったためしがない」とし、「ひとりひとり首を絞めまわろうかしらと思った」と懐古し、課題レポートに『広辞苑』からの引用があるレポートに対し「講義全体をバカにしたもの」と述べている（p.25）。そのほかにも、学生のレポート・論文の類型として、「課題を選んだ理由で始まる論文」「『ここで終わりにさせていただきます』で終わる結婚式のスピーチみたいな論文」、「単位くださいと書いてある『クレクレタコラ論文』」が示され、これらと並び、辞書・事典の定義レポートで使うことに注意をむけている。戸田山は特に『広辞苑』に関してトラウマがあるのか、『広辞苑』が具体例として上がっているが、その記述を見る限りにおいて、辞書・事典一般と捉えて問題がないと思われる。

もちろん、戸田山は論文・レポート作成の際に、「辞書を使うな」と勧めているわけではなく、概略、「辞書・事典」は語句を調べるためのものであるので、積極的に利用するべきであると述べている。戸田山の主張に賛同する教員は少なくないと思われる。（し、筆者本人はこの考えを強く支持する。）